94
160

小林豊次郎著

俳流の女神

全

文學同志會出版

俳流女神の生活

能流女神の生活

94-160

紅葉山人題句

筆の頭ちからと

すや箸の先

紅葉

はしがき

女流俳家の序に代ふるに聊か俳諧史を紹介せんとす。抑も斯學が其萌芽を發せしは遠く足利氏以前にありて、其後ち德川氏時代に至り所謂談林派といふもの出て來りて十七字の句を形作りたり、この期間に於て北村季吟の門下に松尾桃青あり、これまた彼の滑稽趣味を帶へる談林の潮流にまき込まれつゝありたり、季吟といひ、西鶴といひ、梅盛といひ、其他當時有名の人々は、敢て愚物といふにあらず、眼に万卷の書を讀み、耳に文學の何たるを聞き、學才ともに備はるの人々なるが、惜らくは古有の習慣を脱し得ず、俳諧とは單に連歌より起りたるたはふれことゝのみ思ひ居たりき、こゝに於てか蛟龍は長く池中のものにあらず、桃青一大抱負を以て奮然袂を拂ひ談林の汚臭を脱し、始めて俳諧をして文學の堂上に上らしめぬ、これ俳諧史上第一の革命者として可なるべし、頃しも天下泰平、槍劔の何たるを論ぜず、日に詩歌文學を唱ふるもの多く、即ち桃青が其時機に逢遇したるものにして、またその博學溫雅なるは門下の欽慕するところとなり、其角嵐雪を筆頭とし、素養文才無備の門下三千を以て數ふるに至る、豈にまた盛ならずや、こゝに於て門下は師を助け、師はまた門下を助け、兩々相

待ち、さながら車の兩輪の如くし、遂に正風俳諧の基礎を固めぬ。艷麗なる花はこゝに久しからず、寶暦明和年間に至つて俳諧枯死して其影をとゞめず、滿目蕭寂冬野の觀ありき、併しながら短詩の美は永く水底に沈むものにあらず、再び溫かき春雨に逢へり。即ち第二の革命こゝ起れり。ここに與謝蕪村なるものありて、其句調は元祿と異りたる古今獨歩の俳躰を作成し、其門下には几董月居召波等あり、なほ他門には白雄曉鍾鼎太等あらはれ俳諧史上燦爛たる光彩を放つ、天明の盛時此時を以て極まれり。

といふべし。其後ち天保年間に至り明月また雲間に隱れ、俳諧また暗黑の裡に漂ひ、昔日の榮華は夢にだも見る能はざるに至り、偶々俳諧を唱ふるものあれば其文學趣味の何たるを解せず、悲、將棋と其類を同ふし、隱居の消閑の具となり、或は遊治郎の玩弄物となり終はんぬ。然るに明治の太平は文華の發育をして助長せしめ、邦の東西を問はず、洋の南北を論せず、文物の輸入夥しく、從つて古有文學燦然として起り、俳諧また元祿天明に優りて、遂し茲に第三の革命は來れり。

現今は問はず。要するに延寶より正德に至るまで大約四十年間を最も盛に俳諧の行はれたる時なりとす。泰西のある學者曰く『ナポレオン』時代の佛人は皆な小『ナポレオン』なりと、蓋し一個の英雄豪傑出づれば天下の人みな其風化を蒙むるを云ふなり。

文學に於ても亦斯の如き風潮あるを見るなり。されば桃青いでゝ正風の俳諧ひらけ榮枯盛衰の感は其咏に上り、雪月花の賞は其句に顯はれしより天下に俳諧を學ぶもの漸く多く、上は玉樓錦繡の貴き邊、下は蓬巷弊縷の賤奴におよび、その影響は女子社會にも及べり。當時女子にして俳諧をよくせしもの多し。夫れ女子の性質たるや、纖密にして物に感ずること男子より深きものなるが故に、其咏み出せる俳句も自づから溫柔嬌和にして一種の情趣を含み、人を懶殺する點に至りては男子の咏句より却て強き力を有せり。

茲にそれ等女流の小歴と俳句とを蒐めて一册とはなしぬ、素より淺學の著者なれば杜撰は皆むるなく、反つて教授の勞を執るに吝ならざらんことを、併せて斯學が將來まで〳〵文學の範圍内に於て永久立たしめんことを嘱望して止まざるなり。

明治癸卯の初夏

於千萬夢堂

鶯里山人識

俳流の女神目次

美津女……一
智月尼……三
捨子……一九
園女……二三
砂色女……四九
千代女……六一
多代女……一〇九
花蘭女……一四一
柿風尼……一六三
西島某の妻……一六五
某の妻……一六七
遊君の俳諧……一六九

さ女……一七九
高尾……一八一
吉野……一八三
演狭……一八五
瀬川……一八七
附錄
鶯里狂句集……一八九

俳流の女神

小林鶯里

美津女

美津女は天正十一癸未年伊勢國山田に生れ、後ち杉木喜右衛門といふ人の妻となり、諸藝に達し、俳諧は杉田勾當に學び而も之を宜くした、江州日吉の社へ奉納したる歌仙の内の吟に

啼くにさへ笑はゞいかに時鳥

また名吟としては

右左しれぬわらびの手先かな

正保四丁亥年七月二日、六十五歳にして歿した、

彼の俳界女流に於ける清少納言ともいふべき渡會園女は此の美津女の門弟であるといふことは『名家談叢』及び『俳家奇人談』其他諸書の傳へるところであるが、想ふに美津女は正保四年に歿し、其後ち六年を經て、承應二年に園女は出生したのである、彼れ園女は後年美津女の俳風を慕ふたとすれば疑はしからねど、其れが子弟となつて學んだとは抑々如何なる誤謬なるか、之れ俳史を調ぶるものゝ一大研究を要すべきことである、要するに前二書が傳ふるところの虛說なるべきか諸子夫れ、幸ひに此事の敎授に吝ならざらんことを。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

智月尼

智月尼は近江大津の人、寛永十癸酉年に生れ、其の子に乙州ありて母子共に芭蕉を師として俳諧を善くしたのである、尼は或る年乙州の東へ旅立を送つて

わざとさへ見にゆく旅を不二の雪

また嵐蘭の死を悼みて

鳴出して米こぼしけり稻すゞめ

ある時尼は紙と筆とを備へ、師の芭蕉に向つて、後ちの紀念となるべきものを書きて取らせたまへ、と請ふたことがあつた、蕉翁は頷いて、六十に餘れる老尼に紀念の品を望まれていとも心細し、と戯れながら書きて與へられたといふ、是れぞ元祿七年のことにて、其の年の十月

浪華の凶報に接したので、尼は豫じめ翁の死期を知つて其れて紀念の品を請ひたるものであらうと關係者は語り合つたそうな、

尼は蕉翁の歿後、時々義仲寺に詣てゝ追善供養に心を用ひ、絶えず香花を供へたと傳へる。

智月尼の『三道論』といふ文章がある、左に

三道論

智月尼

抑此國に神儒佛の三道駢らび行るゝ、往昔より久し。廣く他の美を容れて忌み猜むこと無き、豁然たる大量の國風ゆへ日の本を異國より君子の國と稱せしこと有りとかや、いづれの道も各自の廣き益あるがゆへ、世々の帝王よりも立て置き玉ふ所なれば、自他神道の正直質素を本となし、儒道を以て身を修るの助けとし、佛道を以て先祖供養の處として粗畧せざれば、公の御掟に背くこと無し。然る

に凡下のやゝもすれば其好む所に偏り、互ひに三道を議論し、肩肘を張て恚怒り競ふ族有り、畢竟文學の足らざるに似たり。

何程の博識學者にもあれ、一字不通の愚者が堅固に御掟を守るには劣れり、如何となれば三道すべて、帝王にも御信仰ましますなれば、假令へ口先の辨論に勝ちたりとも公より立て置るゝ所に背くと謂ふ可し、然らば各意に信仰すればおのが隨意、何ぞ論をなさん、君子其國に居ては、其大夫をも謗らずと曰へり、是れ君の御眼鑒を以て命じ玉ふ大夫を譏れば則ち御政道を誹るに等しければなり。

面々凡夫の身にて、宗門を爭ふ人も亦同じ、天竺の釋尊は何の宗旨にも無く、唯佛道なり、其御弟子より大小乘の諸宗別れ出て、震旦に傳へ、本朝に渡り、三國の祖師と呼るゝ人は、すべて大智識大德にをはします故、愚なる俗の意より、思ひ議る可きかは、一宗一派

の祖師方、宗旨を爭ひ玉ふとも眞實の優り劣りを分たんは、釋尊再來し玉ふに非らずば決定す可からず。我子孫たるもの、公の御掟を背きて罪人となる勿れ。

世俗の三道を論議すると、宗旨を爭ふとの二を辨破し以つて世俗の惑ひを解きしもの、而も婦人の身を以つて俗の惑ひを解くは婦德の累とでもいふべきか。

尼は晩年に至つて、我身の老衰したるをかこちて、

我形も哀れに見ゆる枯野かな

其の閑幽なる俳風、捨て難きもの幾百句ある。

寶永三丙戌年、尼は行年七十四歳にて寂す。

* * * * * * * * * * * *

智月尼俳句

《春之部》

鶯

鶯に晝笑はるゝ帽子かな

鶯や手もと休めん流しもと

春

苔なる梅あたゝむる春日哉

大和路の望の春も暮にけり

柳

ねち上戸けふは柳にやらしませ

櫻

それでこそ命惜しけれ櫻花

入相の鐘に痩るか山さくら
山さくら散や小川の水くるま
盤子白川へ行脚を聞て
鉢の子に請よ櫻は散りぬとも

花

我年のよるとはしらす花盛り
あふ阪や花の梢のくるゝま道
兄弟はたんたいさかへ花にこそ
羽黒の呂丸は未だ若うして風雅の友をしたひ初て
洛に上り程なく身となりしこそ尚あはれなれ
國の子はわろさ云ふらん手向花

蛙

溜池に蛙生るゝぬるみかな
孫を愛して
麥藁の家してやらん雨蛙

桃

桃見せて泣す尿せす婢子かな

《夏之部》

時鳥

晝まてはさのみいそかす時鳥
たゝ有明の月そ殘れると吟しられしに
歌かるた憎き人哉ほとゝきす

筍

筍や皮つきこはし甲武者

竹の戸や境めもしらす二番生

衣更

眞愚上人にわかるゝ

さつはりと衣たゝかれ衣更

牡丹

白牡丹子は幾人も持けれど

芥子

あるとなきと二本さしけり芥子の花

なくられてこぼるゝけしや日の移

芥子咲て見るや近江の船の足

夏菊

夏菊や藥とならん床の上

蚊

獨寐や夜わたる男蚊の聲佗し

涼

涼しさや夏田の畔の畫あかり

崎風はすくれて涼し五位の聲

芭蕉の舊庵木曾塚にて史邦に別るゝ時

宵寐して涼しく歩め朝のうち

路通西國旅寐も去年今年と立歸り文來りしを發句

して返す

其まゝにあれよ涼しき骨海月

琴彈て老を嚙せよ夕すゝみ

螢

分なから童へらしさよ飛螢

蟬

逢坂やいとゝせきあふ蟬の聲

晝顔

晝顔や雨降り足らぬ花の顔

《秋之部》

朝顔

朝顔の咲や親にも呵られす

月

二つあらはいさかひやせんけふの月

川上て菜を洗ふたそ月の顔

名月や志賀の磯田の榎いろ

おそ〳〵とむかへは月の御光哉

手をついて月指のそく松の間

天水にたまる月影ま一盃

名月に鴉は聲を呑まれけり

立待や痺直さん臼の上

寐待月舟もしつかに行次第

居待月起て守らん枕挽

きり〳〵す

きり〳〵す鳴や案山子の袖のうち

年よれは聲はかるゝそきり〳〵す

菊

枯れぬ間に問へやとはれや菊の花

落葉

母の墓にて

我影のそれりと覗く落葉かな

案山子

亡父の七回忌をとふらふに我と同じ道なる人々來りければ

案山子にもあはれさまけし尼仲間

稻

七度の花のはしめや早稻の花

鳴出して米こほしけり稻すゞめ

秋

知てしらぬ身のほと悲し秋の暮

秋ひとりさへられもせぬ寐覺哉

《冬之部》

霜

木々の根の獨くつろく霜こほれ

雪

雪の夜や朧豆腐のなつかしき

佛の日誰にわかれの雪の肌

初雪の疊さわりやしゆろ箒

老の寐さめのかきりなきに

雪やけや夜毎に孫か手をふかせ

木曾義仲寺の塚に詣て

雪消えてあはれに出し朝日塚

降雪になほ大きかろ不二の山
いふまいと思へと雪吹死手の旅

鉢叩

鉢たゝき夜更けて道の廣さ哉
幽靈に水呑ませたか鉢たゝき

待春

待春や氷にましる塵、あくた

冬籠

雪信か草花珍らし冬こもり

寒

路通の行脚を送りて

見ゆるさへ旅人寒し石部山

芭蕉翁三七日

像の畫に物いひかくる寒さ哉

木枯

木枯や色にも見えす散もせず

枯野

我形のあわれに見ゆる枯野かな

水仙

水仙の花の高さの日影かな

冬

芭蕉翁四七日

冬の日や老も半はの隱れ笠

氷

芭蕉翁六七日

跡の月思へは氷るたゝき鉦

火桶

芭蕉翁盡七日

嚙したく反古のはさむ生火桶

年暮

流るゝや師走の町の煤の汁

酒盛や一雫にて年の暮

押よせて鶯一羽年のくれ

年内立春

冬の春心の外や梅の花

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

田氏捨子

田氏捨子は丹波國柏原の人、寛永十一年に生れ、幼時より極めて聰慧にして、殊に風雅の心たかく、寛永十六年彼れ六歳の時、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

の句を吟さみて人を驚かしめたといふ、實情眞影を映し出して、眼前に横はるこの句を見て、誰か六歳の少女の作と想へやうか、實に奇才といふべきである。

其後ちある年の事、國守入府の時、捨女の家に尋ね、その奇才を譽め給ひて

柏原にをしや捨をく露の玉

此の女歌俳を季吟法師に學び、其後ち故あつて俳諧を松堅に學ぶとも

いふ。

承應二年、彼れ廿歳の春宗族を聟に迎へ、三十歳に到らずして良人の歿したることゝて、盤桂禪師を師として尼となり妙融といふ（或る二三の書には貞閑とある）其の時の歌に

秋風の吹來るからに糸柳
こゝろほそくも散る夕べかな

其の後ち悟道のさま師の心にかなひ道心堅固と認められて師の寺なる播磨國網干村龍門寺の傍らに一庵を設け、名づけて不徹庵といひ、其所へ住ふことゝなり、專ら貞操高く、風流に餘命をおくり、元祿十一年八月十日、享年六十五歳にして寂す、謚して嶺雲貞閑禪尼といふ。

附て曰ふ續俳家奇人談の掲ぐる處に依れば、彼の盤桂禪師とは元祿年間の人にして、其の法德世にかゞやき、迁化の後ち勅せられて、大法

正眼國師と謚す、この師佛道修行の便りにもと、臼挽歌廿一首を詠ぜられ、今世に知らるゝ所であるさうな、また俳句に

草よ木よ汝に示すけさの露

是れぞ悟道發明の一咏である、と。

* * * * * * * * * * * * * *

捨女の俳句

雪間

うき事になれて雪間の嫁菜かな

ねはん

拜みたし涙くもらてねはん像

櫻

花をやるさくらや夢のうきよもの

蜩

日くらしや捨て置ても暮るゝ日を

桐一葉

來る秋のきりきは見する一葉かな

秋の暮

思ふことなき顔しても秋のくれ

女郎花

粟の穂や身は數ならぬ女郎花

尾花

吹なれて皆にもならぬ尾花かな

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

度會園女

女流俳家として其の最も秀でたるものは園女と千代女てあらう。むかし〳〵平安の朝に紫式部と清少納言との二女があつて共に文道に通じ日本文學者として嘖々の聞えがあつた、然れども其性質は相異り、式部は溫柔淑艶の女子にして其文もまた女らしけれ、納言は活潑奇才の人なれば其文も女手とは思はれず不羈强健間々男子を陵駕するものがある。園女と千代女の性質を想ふに、恰かも清紫に相似たるところがある、千代女の緻密にして濃厚なるは紫女の如く、園女の奇才男子にも讓らざるのところは清女の如くてある、然れども是れは性質上のみのことにて俳諧に於ては兩者常に女性の溫柔を失ひたることはない。夫れ女子の性質たる緻密にして物に感ずること男子よりもより深きもの

なるが故に、其の咏み出せる句も自然溫柔嬌和にして一種の情趣を含み人をして惱殺する點に至つては男子よりも却つて强き力を有するものである。

園女は勢州松坂の人、渡會氏の女にして、承應二年に生れ、和歌を好み、先天的の風流である、俳諧は初め松本美津女を師とし、後に蕉翁に學び、翁の歿後は其角に從ふたのであつた、備前の人岡西帷中の妻となり浪花に住ふ、或時蕉翁の行脚して來ると聞き翁を請招て饗應した、翁は園女が敬恭にして禮あるを感じて

白菊や目に立て見る塵もなし

園女は是れに脇して

紅葉に水を流す朝月

元祿五年夫岡西氏歿す、氏ははじめ望一に學んで一有といひ、後ち梅

翁に從ふてより帷中と改め一時軒と號したのである

上元や松にはじめて春の月

とく散て見る人歸せ山さくら

ひと歲旅を行夏に逢て

帶古しいまだ旅なる衣がへ

壯年より醫を業とし、書も能くして其名頗る聞へたのである。

園女は夫の歿後一年京洛を逍遙して江戸に來り、深川に住居し眼科を以つて常の產業としたのであつた。

琴風が記に

『この女かしより世事に疎く、袖下の紅脂を切つて下駒の鼻緒を調べ、張文庫の蓋を取つて水ながしに用ゆるなんど、其跡かたもなき事も、風雅の上の興なりけらし、近き頃佛道に入りて天窓丸めたれ

ど、眞中を十筋ばかり殘せるも可笑し、是は唯一むかしを恐る成べし、斯の如き者ゆへ禪理も悟道せしにや、自ら雲虎和尙に答へる書にも

《來書の趣拜見申候、不求眞不求忘は大道の根源、唯も存ずる所、憚ながら珍からず候、一心源頭に上ての所作、柳は綠り、花は紅ゐ、唯その儘にして、常に句をいひ、歌を綴つて遊申候事に候、無益の口業ならば一切經も無益の口業にて候、法臭き事は嫌にて、我平日の行は念佛と句と歌となり、極樂へ行はよし地獄へ落るは目出度し

和玉韻

自己念其不覓心清燈已燿一燈心市中點々有明鏡全識人間清淨心。

誰か見ん誰か知へき有にあらず

無きにもあらぬ法のともし火

其才氣すべて此の如しと、云々

此の如き答書の活潑すぎたるは、其の特性の溢れ出たる處であらう。

又た園女の『兄弟は他人の始めと云ふ義を論ず』といふ文章がある、左に

兄弟は他人の始めと云ふ義を論ず　園女

諺に兄弟は他人の始めと、誰渠常々申すことなるが、是れに二色の意味おわしまし候。

一色には、高祖父母、曾祖父母、祖父母、父母、己、子、孫、曾孫、玄孫と、正統の血脉九代の間、己より上に四代、下に四代に定め、此上は幾代も先祖、此下は幾代も後胤と稱し、百代も連綿たる血脉にて候。

右九代各兄弟有つて、伯父、叔母、甥、姪、從弟等の親類となり、遠類となる、是れを九族と申す。從弟の子は從弟違ひ、其は又從弟、其子は名目も無く他人にて、血脉肉親の他人となる始めは、兄弟有るに依てなり。若し兄弟姉妹無ければ、肉親他人となり行くこと無し、扨こそ兄弟は他人の始めにて候。

又一色には、一腹一生の兄弟三人四人有る時、孰れも畫は親の膝に遊び、夜は懐に抱かれ、親の丹精に育立つは、皆替ることなく、漸く懐を離れ、親の手元に遊ぶ内は兄弟食物を分ち、起臥を俱にし、嗟きこと猫の子の四疋五疋累り合ふて乳を飲むと思へば、一時に狂ひ戯むるゝに異ならず、餘念も無く惡念もなし。段々成長しては、惣領に嫁を迎へ、次よりは或ひは分家し、或ひは他家を續ぎ、或は嫁に遣わす、此頃は各自慾心の私出で來り、友愛の善心を掩ふゆへ、

親の財寶は面々我物にせん、配分の物は我ぞ餘分を得んと、慾心より兄弟いつしか不和の思ひ有り。各妻を持つ時は、他人雜つて相談の相手となる故、いよ〳〵不和の心を增し、竟に内心互ひに仇敵の如きも世間の謗りを怖れ、表に愛情を飾れども全く僞りゆへ心と詞は表裏の差ひ有り。毛詩と云ふ書に、兄弟墻に鬩へども、外には人の侮りを禦ぐと有り。斯く成り行けば後には育立てられたる親の高恩も忘れ、親の子を愛するに依估有つて一ならずと怨む。最初め親の意には、兄弟多ければ亡き後迄も互ひに扶助け有りと、末頼もしく思ひの外、兄弟他人には遙かに劣り、恃みにも力にもなる可からず。第一親の心を安んせず、不孝此上も無く、天罰遁る可からず、親子は長しなへに親く、兄弟となれば情愛疎くなり易きを、他人の始めとは申すなり。

成長より腰の屈局む迄、父母の膝下に遊び合ひし意を忘れず、親の無き後は肉縁に兄弟ほど近き無きゆへ、萬事互ひに相談を遂げ他事無く力を添へ合ふぞ兄弟の道に叶ひ、親えも沒き後までの孝行、面面子孫繁榮の基におはしまし候、穴賢。

行文に多少の瑾疵はあるが一の敎訓としては見るべきものである。深川入幡境内に『歌仙櫻』とて、園女が三十六本の櫻を植えたといふことであるが、今は其蹟がない。

園女は善く貞操を守り、俳席といへども曾て男子と竝び坐せることなく、享保三年、六十六歳の時剃髪して智鏡と改め禪に入つた、彼の琴風が文中に

近き頃佛道に入つて天窓を丸めたれど、云々

とは此時である。或る書には享保八年六十歳にして剃髪云々とあれども

も、是れは杜撰であらう。後ち冠里公の母君に仕へたこともあつたそうな。

享保十一丙午年四月二十日、享年七十四歳にして歿す《竹窓玄々一の遺稿にて文化十三年に版したる『俳家奇人談』には六十三歳とある》

辭　世

秋の月春の曙見し空は
夢か現か南無阿彌陀佛

江戸深川靈嚴寺々中念佛堂に葬る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

園女の俳句

《春　の　部》

壬申の八月神風や伊勢の古郷を立て古き都のこゝに來りぬ、その年もあら玉の春を迎へて

難波女や何からとはん事はじめ

春風春水一時來

新らしく揃かけはやあら莚

日參茶屋

長生に德あり姥かすわり餅

梅

晉子十三周忌

名號の香に年はめくりて梅硯

貫之の梅に

梅か香や慮外なからも旅勞

寄今古梅

さくさめの何に色こき梅の注連

氣のはらぬ入相聞て梅見かな

壬申のとし菅神御忌にあたりたまふに古き神書を奉るとて

梅年をおよそ八百何十年

春

春の野に心ある人の素顏かな

手をかへて折ゆく春の木艸かな

青柳

青柳も宗祇の髭の匂ひかな

雉子

雉子の啼鏡の奥や天の原

菫

明野

咲ぬ間もゝのにまきれぬ菫哉

染たらて山まてそめる菫かな

鼻紙の間にしほむ菫かな

柳

伊奈木川

手操舟風は柳にまかせたり

燕

かくいへる我も別を惜しみて、

契りおく燕と遊ん庭の猫

大和見にまかりさふらふとて

燕にしばしあづける舍かな

花

伊賀越

松山の間〳〵や花の雲

御材引

講親のはたこの馬や花かつら

花の前に顔はつかしや旅衣

蒲團まで朝の寒さや花の雪

春

宮川をわたりまた夜深し

色あひもわつかに春の夜明哉

櫻

追〳〵に來る人ことの櫻かな

舍たつとて

眠たかる人になる見えそ朝櫻

思夜櫻

夜さくらや太閤樣のさくら狩

尾部山

三絃の拍子にかゝるさくらかな

けふ見る花にわらはべかともてはやして

ことづかる菓子の封切る櫻かな

散たとの狀は屆つさくら狩

山吹

六田渡

山吹に川よりあかる雫かな

寄拾遺疑冬

山吹にいしう射たりや雀弓

男もすなるやまとしまねの月を女はをして見んと

するをあさける人もありけれといさしらすといは

んもいかゝ侍らんいとけなき時より初しこきのこ

のひいふ三つ四つ六玉川の水のもと末もわいため

なくしていく瀨のいたりをなんたとりしかされは

よとちうせい駒のくつはつらをひかへていさゝか

の所の水かひてんとて見すもあらす見もせぬ所々

を筆の鞭打はいといふ俳諧の句にやをらになひ出

し山吹よと呼かけてわたさぬ川をさはあらしかし
とまれかくまれすなるみちはいなひてもいなとは
人のいはせましものをと百丸子といへる好ものゝ
おのこのもとになんまゐらせぬ

山吹に馬乗出して六玉川

藤

ぬれ筒も藤しつみたる暮の色
大炊の目出たき顔や藤の花

春

牡丹花は實に香を愛し給へりしや酒も香あり花も
香ありさればこそ夢といふ庵にはふして金角の中
には乗りたまひけるやかゝる風流の身より出來れ

は其ことはいはんもさらにや猶あやしきは此翁の
和泉の堺を今や主はおかぬか主はおかぬかといひ
もて過させしをおき申さんと呼入し人ありけれは
それよりそこに住たまふことありとやいふは風流
よふも風流いまむきの題にて俳諧の發句すにげな
くはゝかありや

笠の圖にとれや氣にあふ春の道

《夏之部》

更衣

はや膝に酒こぼしけり更衣

四月朔日當麻寺にて

更衣みつから織らぬ罪深し

同じ日香久山にまかりて

あら美しうの花は誰更衣

卯の花

卯の花や品もかはらぬけふの花

若葉

猿澤にて

水若葉被着て來し人の影

幟

祭ちかし入帆につゝく幟哉

螢

寐所へ扇にすゑし螢かな

夏の月

川中にとゞして見たし夏の月

爪

こゝろみんと爪に眉かく端居かな

素手を宿して

進出て爪むく客の國はなし

暑

手のこひも笠てかはかす暑かな

氷花子餞別

歌の尾も馬上の吟の暑かな

團扇

靜掃風軒散髮眠

卷〳〵の中に吹かるゝ團扇哉

涼

涼風や餘所の鉦鼓に南無阿彌陀

雲の峯

朝熊

乙女子かすへりて落よ雲の峯

夏神樂

住吉にて

けふ來ても何の傳授か夏神樂

《秋之部》

月

神垣や御百度うつてけふの月

寄芭蕉雨

名月や雨にひらいて文字なき葉

兩後曉天晴

得た貝を吹て田みのゝ月見かな

蕉門を招きて

名月や後は誰着ん檜笠

名月や琴柱にさわる栗の皮

萩

朝露のうちにと萩の便かな

薄

迷子の親の心やすゝき原

海邊薄

むら薄輪にはる風や帆の餘り

野分

小原女や野分に向ふ抱帶

新酒

風の名の付て吹より新酒かな

菊

住吉奉納の內

成仲の松の祝ひをけふの菊

砧

深更砧

いねかしと思ふ咄のきぬたかな

行秋

行秋や三十日の水に星の照

《冬之部》

霜

白糸に霜かく杖や橋の不二

寶晉齋のもとに馬下し侍りて

霜やけを不二の光にこゝろ儘

時雨

近道を阿闍梨につるゝ時雨哉

神祇

此猿はやしろ久しき時雨かな

初時雨阿佛の旅やつゝら馬

木枯

木枯やこほれて畫の牛の聲

住吉に詣て丶神慮を仰き奉る

木枯やゆつり合て海の汐

木の葉

閑居

葉の音に犬吼かゝる嵐かな

露は秋時雨は冬となんさためこやこそ〳〵と反古とり出て火桶ひとつをはりまはす是は何の翁に俊成頼政をならふにもあらすたゝひとつにて吾冬を過さんとなり春より後はといはゞあらはあるまじわれなはもとのつちくれこそともしとはゝかく答ふへき

膝もとの折敷に糊の木の葉かな

寒

年よれば鼠もひかす寒かな

紙衣

ある程の伊達仕盡して紙衣かな

年の暮

俊成の女とは誰としの暮

籠菊かあふきも古し年のくれ

行年や老を譽めたる小町の繪

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

讀初や聲の古びし百人一首　鶯里
陽炎を踏て普請の地割かな　同
けふの雨されども花の見頃なり　同

芍藥やとなりの富を羨まず　鶯里
水樓のかげ置く鳩の浮巣哉　同
月すゞし只水色の濵やしき　同

けぶの月巻られながら昇けり　鶯里
已が飛ぶ影を慕ふや秋の蝶　同
笑ひ〳〵さぞ傾城の秋の暮　同

人訪はぬ無住の寺や棚の花　鶯里
つり蚤や雪の中ゆく祝もの　同
除夜の鐘嵐と花の垣一重　同

秋色女

女流俳家として名を後世に傳へたる秋色女は江戸小網町菓子商大目といふ家の娘にして、天和三癸亥年に生れ、名をお秋といひ、怜悧にして先天的の風流であつた、彼れ十三歳の時、則ち元祿八乙亥年の春、或る日上野の花見に行き、清水寺觀音堂のうしろの井の端に大般若といふ櫻を見て

井の端の櫻あぶなし酒の醉

と口ずさんだ、その頃の御門主切に風雅に心を率ぬ、木々に附したる詩歌俳句を日々に取あつめて甲乙を評せられたといふ、此句その頃の秀逸として聞へ玆にその樹も秋色櫻と名づけられたのである。然れども現今に存する秋色櫻は彼れが俳句を吟した時の櫻にてはなく、それ

は今より百年も前に枯れたるにて今は殆んど三代目である。

彼れ十五歳の時、寶井其角の門に入る、其節の吟に

蜆とり早苗にならふ女かな

又ある時武家へ召され、御酒興の上、殿にはいろ〳〵と秋色に戯ふれ給ふに

ものゝふの紅葉にこりず女とは

と口ずさみ、當時堂々たる五尺の俳男子をして驚嘆措かざらしめしといふ、其後俳名日に高く、俳諧の判者となり、菊后亭といふ。此の女性來頗る孝順にして、其行爲の賞揚すべきもの多く、或る時一諸侯の召すとことなり、父は日頃より其の諸侯の庭園美くしさを聞き、如何にもして之れを見やうと思ひ居たることゝて、よき折なりと、父は秋色の從僕に粉して其の邸に至り、殘る隈なく庭園を賞觀して辭した、

その歸途雨は俄かに降り來つたので歩行の困難はいふ迄もない、秋色は諸侯の邸より駕輿にて送られて歸るものゝ、父は從者の躰なれば駕輿にも得乘らず、とぼ〳〵と歩んで居る姿を見て悲しき事に思ひ、殊更に駕輿夫に用事を命じ、その居らぬを窺つて、父を誘ひて駕輿に乘せ、自身は父のまとひたる竹の子笠、赤合羽を持て身を掩ひ、父の風體を爲して家に歸つたといふ、その孝志、この一事に兆しても知るべきである。

其後ち寒玉といふものゝ妻となりて二男を儲け、一男を林鳥、二男を紫萬と號したのであつた。

師の其角は終年に至つて放蕩にして居所を定めず、多くは秋色が家に住ふのである、故に其角の點印はその歿後秋色の借りるところとなり、晩年に及んで湖十に是れを傳與したのである。

享保十乙巳年四月十九日、彼れ四十三歳にして歿す、其辭世に

見し夢のさめても色のかきつばた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

茲に秋色女の俳系を掲げやうなれば

◉松尾芭蕉（正風）

◉榎本其角（此派を江戸座と云ふ）

◉秋色女

秋色女俳諧

友寐して鍼立寒し戀の丸　秋色

齒くろ貰ひに霜の袖笠　其角

よそにのみ早打みれは轟て　專吟

數ふる雁に爪のない指　秋色

月のうちの葛籠男はくもる也　其角

伏屋のうさい酒臭い菊　專吟

うら問に落ちてくやしき私語　秋

御產所ながら同じ產月　其

折からと四條畫て繪帷子　專

水の出はなを長と不知成　秋

はつかしや此かちよりの艸履取　其

筑摩のまつり世にはぬり笠　専
をしたては薗生の竹のすうはりと　秋
天の川瀬に化物の首尾　其
涎さへ枕にぬるゝ月の色　専
たれに抱せんすまふかもうし　秋
ちり迷ふ花に静も半合點　其
白い歯見せよ猫も狂言　専
春めくや馬に嗅する菓子袋　其
かゝみ山から楊枝めせ〳〵　秋
不住の身兵衛の時を語出し　専
漕はなれては蚊をしらぬ舟　其
居風呂を軒の鱸にのそかれて　秋

しのぶのみたれ仙臺の繪符　専
殘月に小遣ひ哉百文わたす　其
波はよせてもうらのない足袋　秋
近道へすゝめ申せは楫まくら　専
九佛の日記を十佛の〆　其
松盆に逗留中をもしほ艸　秋
たま〳〵あふは玉味噌に小菜　専
夕烏ひしりの弟子を一つなき　其
あの山見さい江戸にない山　秋
大義して御本陣まで花に折　専
清浦近しいさ櫻鯛　其
うくひすに心の駒の朝はしり　秋

上下の者のおほろくと　　專

秋色の俳句

《春之部》

菫

雉の尾のやさしくさわる菫哉

櫻

そも我は鐘に用なき櫻かな

花の色は乳母にはなれよ櫻町

別霜

霜の鶴土に蒲團も被けられすと子を悲みし人もとも流水むなし

親も子も同し蒲團や別霜

《夏之部》

五月雨

五月雨や人伺公してかいつふり

子規

裏を着て寐よとの鐘か子規

清水

どう見ても何やら足らぬ底清水

氷花子餞別

石に針生姜も入す清水哉

百合

其角を悼む

日〳〵に諸手合はせて百合の花

蓮

佛めきて心おかるゝ蓮かな

《秋之部》

女郎花

身を耻よくねるとあれは女郎花

露

初露に風さへしめる扇かな

萩

萩に來て筑摩の人か五本松

雁

箱王か指す雁や暮の鐘

月

けふの月姿とは呼はぬ小町哉

月みつと和泉式部も恨かな

揚貴妃の睦言もなしけふの月

夕顔

夕顔やさすがとひても器量ほど

菊

白菊にうはの空なる銀化粧

《冬之部》

氷

十德の袖は涙の氷かな

雪

京の人に逢て

尾花

嵐雪三回忌題排子

冬枯に畢竟おとる尾花かな

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

加賀の千代

女流俳家の一人として名を識られたる千代女は、加賀國松任の人にして元祿十五壬午年の生れである、父は福增屋六兵衛といふて家は餘りに豐でなかつた爲め幼時より家事萬端に使役せられて居たので別に深き敎育はなかつたのであるが天性の雅才は彼れ千代女をして俳豪たらしめたのである、彼の『近世畸人傳』に曰ふ

千代女は幼にして俳句を好む、されど僻邑良師に乏し、會々有名の俳士廬元坊行脚して松任に來る、千代女直ちに之れを旅亭に訪ひ己れの志を述べて敎を乞ふ、時正に初夏、廬元坊即ち時鳥を題として之れを授く、千代女千思萬考、夜深けて廬元坊既に眠るも未だ句を得ず、沈吟曉に達す、廬元坊覺めて問ふて曰く、夜明けたりや否や

と、言未だ終らず、千代女卒然歌ハり

ほゝきす時鳥とて明けにけり

と、廬元坊大いに賞して曰く、是ある哉是なる哉、斯の如くにして後ち名を天下に著さむと、遂に師弟の約を結ぶ、云々と

然れども文化十三年の版にして竹窓玄々一の遺稿たる『俳家奇人談』に曰ふ

千代女は加州松任の人、少小より支考の門に遊ぶ、支考死して、猶其師を得ず、或時美濃の廬元坊行脚して來れる折柄、その旋宿に就て相見し弟子になる云々

其何れを先に師となしたるかゞ不明てある、其後ち乙由を師とし、繪は越の吳俊明に學んで兩ながら秀たのである。或時畫を上に讃を下に臨まれて、朝顏の蔓の垂たるところを上へ畫て、其下へ

朝顏や地に咲くことをあぶながり

と書いたので、依頼者は其即妙なることに驚ろいたといふ。

享保四己亥年、千代女が十八歳の時、金澤の表裝師福田彌八に嫁ぐ、其初めて良人に見へたる時、身を卑下して

澁かろかしらねど柿の初契り

其後ち享保十一丙午年、彼れが二十五歳の時、良人は千代女に先立つて幽冥ところを異にしたのである、彼れは愁然として吟ずらく

起て見つ寐て見つ蚊帳の廣さ哉

海老百年を契りたる良人鬼籍の人となり、今は浮世のあじきなきを覺え悲歎の涙に日を途り年を迎へて二十七歳、則ち享保十三戊申年、男子に家を嗣しめて尼となり以來專ら俳諧に心を委ねたのである

或人彼れが身體の偉大なるを笑ふたので、彼れは

ひとかゝへあるも柳は柳かな

と答へた

領主前田侯の通行ありし時千代女は側らに行むて居た。侯は千代女を近く召して即吟を需められた、千代女は取敢へず

飛んで出て梅に手をつく蛙かな

ある時也有の庵を訪ふたことがある、其時千代女が臥して仰向かなんだといふので、也有は直ちに

顔あげろ同じ流れに栖む蛙

と遣つた、千代も又直ちに

仰ぬひて見れども高き朧月

兎に角奇才があつたには相違ない。

又ある時諸侯の座に伺候したことがあつた、其時に殿より『身分は如

何に』と問はれて、千代女は

伊ざなぎの憚りながら瓜の蔓

と答へた、いよ〳〵以て奇才である。

また或る日のこと柳を見て

のびる程土に手をつく柳かな

此句は今猶道歌として一部の講話の材料に上つて居る。

ある夏の夜、或る人戯むれに千代女に困らしてやらうとて、方圓三角の三物體を題としての一句を需めた。

千代女は即吟に

蚊帳のすみ一つはづして月見かな

茲に千代女の俳系を掲げやうなれば

◉松尾芭蕉（正風）

●岩田涼菟（伊勢風）

●神風館曾北

●中川乙由

●加賀千代（初支考門）

延享三丙寅年、千代女四十五才の時、子を失ふた、其時の句に

蜻蛉つり今日は何處まで往たやら

破る子のなくて障子の寒さかな

眞に母子の愛情溢るゝ如くである。此句に依つて按ずるに、千代女が良人を失ふたる時は二十五歳である、譬へば此の子が彼れ廿三四の時に出生したるものとするも彼れ四十五歳なれば其子は二十歳前後であることは數ふる迄もないことである、若し千代女が良人を迎へたる十八歳の時に妊娠したりとすれば彼の子は二十五歳以上にもなるのである、所謂成年以上の子に對して其の死を悼はるに『蜻蛉つり』『破る子』の句を應用するは其當を得ざるものであらう、七八歳のいたづら盛りの子を失ふたとしか受取れぬのである。之に由つて想ふに或は千代女は二人の男兒を生み、其一人は五六歳乃至八九歳にして失ふたるにあらざるか、それは予の想像のみに止まるのである、古き俳書などを閲

するに、千代女に一人の男子はあるが何れの書にも二人といふことは見えぬ、然れども千代女が子を失ふたる時は慥に四十五歳であると云ふことは或る書に依つて證明することが出來得るのである、固より予は俳諧不學であるから此疑問については識者幸に敎授の勞をとるに吝ならざるを希望するのである。

曾て伊勢の中川乙由の許より文音のありたる時、その端に

花さかぬ身は靜なる柳かな

の一句が認めてあつた、千代女よりも乙由の許へ遣はしたる文の端に

花さかぬ身は狂ひよき柳かな

の一句を認めた、此文音は双方同時ごろに國を出で、同時ごろに兩庵へ着したものにて、其句法は同案なれども狂の一字の靜なるに及ばずとて、千代女は愈々乙由に隨ふの意を深くしたのである。

寶曆五乙亥年、千代女五十四歳の時、素園また妙林に改め、一卷の經一體の佛、身には墨染の法衣を纏ひ、法心淸淨に世を送つたのである。

永平寺の長老おとづれ給ひ、千代女が發心一念三千の心を句に望めば、千代女は即吟に

千なりや蔓一筋のこゝろより

此句について、彼の明和年間石雲居海壽が編したる『歌俳百人選』に收めあるものを轉載すれば左の如くである。

此句は萬法唯一心といへる題にてせし句なり、此千代はいにしへの園女秋色にもをさ〳〵劣らず、いふにいはれぬ俳諧發句の上手なり、萬の迷ひも唯一心より生ずるなり、じかれが皆元は一ッぞかし、老子曰く、天一を得れば淸く、地一を得れば安し、と、又佛法に入る

法便區々なれども唯一を得るにあり、此故に華嚴に三界唯一心といひ、法華には唯一有一佛乘と說き、起信論には一心法界といひ、天台には唯一實相と談し、昆尼には常に一心といふ、淨土門には一心不亂といひ、禪には一心不生といふ、密敎には唯一金剛と說たり、神道にも國常立の一神より段々別れたり、善惡邪正も皆心の一によりちまたに別る、或人の狂歌に

人形の樂屋は心一ッなり
鬼を出そうと佛を出そうと

おもしろき狂歌なり、此千代が句、中七文字の、つるひとつすしの心より、とはよくも置たり、千代が夫死去して其身は其まゝ法躰し

花もなき身はふりやすき柳かな

といふ句を吟じたり、妻は夫を花と詠め、夫は妻を花とながむるは、

世の誠若き者の戯にあらず、年老て猶更の事なり、花もなきとは夫に別れしをいふなるべし、身はふりやすきとは庵を結び俳諧のみ樂みあなたへまねかれこなたへ呼ばれ、風雅に身を委せたれば庵に歸る折もあり、又は先に宿る時もありて心にかゝる雲なければいへるなるべし、是を或人難して曰く、夫死して我身ふり安きといふは不實の言葉なりと。左にあらずそれは千代が若き時ならば不實の手に葉ともいふべし、老年に至りぬれば唯風雅好なれば俳諧に身がふり安きといふ事なり。此句引はなしてたゞの柳の句にしてもおもしろし云々。

加賀の千代といふ名を知るとゝもに、否、彼れの名を知らぬものに至るまでも多くの人口に膾炙したる一句がある、开は

朝顏に釣瓶とられて貰ひ水

又た千代女の『四民論』といふ文章がある、左に

四民論

千代女

四民の世に立つ、各自の務め有り、男に四民有れば女も亦然り。士は亂れたる世に逆ふを伐て靜謐を成し、治る世には暴を禁じ賊を誅し万民を安堵なさしめ、文武を以つて治亂を處し玉ふ君に近侍し、共に其事に與かる故、三民の上に在り。左れば士の妻たり女たる者は風俗髮貌立ち居振舞ひ言辭を嗜み、人柄好く有る可し、形態の婀娜たるを好む可からず、恪氣の心は其身の愧なるを辨へ、夫に心得差ひも有らば詞懊らかに時々諫め、萬一不幸にして危難有る時は、身命を惜まず、舅姑夫に先たち、貞烈の操正しく、いかにも士の妻ぞ女ぞと云はるゝ程にありぬべし。

農は其業賤しと雖とも、上御一人より下諸万人の食を作り出す故、

次で工商の上に在り、其妻たり女たる者は、養蠶織機の事は云ふもさらなり、晝は野先きの餉を持運び、夜は月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業盛んなる時は、夫と倶に朝の風に梳り、夕の雨に浴し、霧を犯し霜を蹈つゝ、粒々の辛苦を手傳ふなれば、丈夫も及ばず疲勞すれども、常々打闊らさたる曠野山水の絶景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば心も悠に自から長壽を保つ可し。農家には先祖やんこと無き人の裔代々連綿として、筋目正しきも多し、質素を本とし、奢侈り無く、如法の風俗移り變らぬ樣に、子孫遠長の相續を心とす可し。

工は食と衣と住との三ッは無くて叶はぬ者の最第一其住を職とし、神佛の宮殿樓閣、帝王の御座、貴人高位の居所を造り作す者ゆへ、商の上に在り、商は金錢の利を積で生活をなす故、下に在り、工商

の妻となり女たる者は、稼ぎは夫に任せ、内を治ること肝要なり、物書縫針の心掛けは定りたる事、間有る時は算數も覺ふ可し、内を治むるとは家事の取締り、弟子奉公人の取扱ひ、師弟主從の間は武士と違ひ、嚴密に過きては却つて渡世の妨げも出て來る可く、忽かせに過ぎては不慮の損失も有る可し、上下其家業を出精し、共俱利潤を得て、家名長久に傳ふることを思ふ可し。

豪富の家たりとも奢侈超え過るは衰微す、況んや其下には分外の美食美服せず、失墜を厭ひ、町家相應の形態を旨とし、妓女傾城の風俗を禁ず可く、朝寐すべからず、毎日の掃除念入れ、夜は火の元別して大切に自から見廻はる可し、下々を憐れみ、他えの挨拶愛相善からんは、繁昌の基たる可し。

四民の外に遊民あり、其妻たり女たる者は、假令へ夫藝能有つて、

當時の世渡りに差支へあらずとも、子孫へ傳ふ可き定まれる職分家業無きは、孟子と云へる書に、恒の産無しと云ふ者是なり。夫にも勸め申合せて、何なりとも家職を取立て、四民の内に列ならんと翼ふ可し。自から今俳林に在りて、遊民を友とすること多し、思ふ所有つて是れを誌すといふ。

斯の如く、四民の事より說き、終に遊民を攻擊して其妻女を警戒するところ妙といふべきである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

安永四乙未年九月八日歿す、行年七十四歲、加賀國松任の聖興寺に葬る、辭世に

月を見て我は此世をかしく哉

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

千代尼の俳句

《春の部》

初日

竹も起きて音吹かはす初日かな

鶴のあそひ雲井にかなふ初日かな

松竹や世にほめらるゝ日の始

花の春

よき事の目にもあまるや花の春

福藁

福わらや塵さへ今朝のうつくしさ

初空

はつ空や鳥はよしのゝかたへゆく

布袋の賛

はつ空や袋も山の笑ひより

初霞

木のもとは翌の事なり初霞

文臺のうら書

初かすみたつや二見のわかるほと

若水

若水や藻に咲花も此雫

わかみつや流るゝうらに去年ことし

萬歳

萬歳やもとりは老のはつかしく

若菜

人あしに驚も消るやわかなの野
道くさも數のうちなり若菜摘
花までは出惜しむ足を若菜哉
仕事なら暮るゝをしまし若なつみ
一いろのあまりは白き若菜かな
白い手の鳥追もあり若菜畑
山彦は餘所の事なりわかなつみ
風の手にけふまて入ぬわかな哉

鶴の畫賛

人音を鶴もしたうて若菜かな

梅

咲事に日を撰はすや梅の花

梅かゝや戸の開音はおほえぬと
梅の花咲日は木々に雫あり

文臺のうら書

梅の月浪の間に〳〵二見かな
梅かゝや谷へむかひに行戻り

追悼

梅ちるやまつのゆふへも秋の聲
梅か香や何所へ吹るゝ雪女

繪賛三章

もとかしや香はとゝけとも梅の花
梅か香につれ立日さへまた寒し
鶴ひとつ何のこゝろや梅の花

梅に香や朝〳〵氷る花の蔭

仇を恩にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅の花

梅花佛手向

なこり〳〵散まては見す梅の花

鶯

鶯はともあれ爰の初音かな

うくひすや又云ひなほし〳〵

黄鸝や聲からすとも富士の雪

うくひすや初音に聞くは幾所

鶯やよし野の沙汰に氣もつかす

黄鳥のものに倦るか竹の奥

柳

晝の夢ひとりたのしむ柳かな

ゑひすの賛

釣竿の糸吹そめて柳まて

手折らるゝ花から見ては柳かな

結ふと解ふと風のやなきかな

うくひすは起せとねふる柳かな

八十の賀

百とせに爰一眠り柳かな

柳から殘らす動く氷かな

みよし野に闇一結ひ柳かな

なかれては又根にかへる柳かな

桑名のわたしにて
見るうちにわすれて仕まふ柳かな

蝶

わか風て我吹をとす胡蝶かな
飛しうの人に對して
蝶〳〵や裾から戻る位山
たんぽゝや折〳〵さます蝶の夢
蝶〳〵や何を夢見て羽つかひ

五百年の法會

をしなへて聲なき蝶も法の場

山吹

山吹や柳に水のよとむこゝろ

水ぬるむ

祖師五百年御忌法會二章

流れ合うてひとつぬるみや淵も瀬も
すゑの世になかれてぬるみ増りけり

春雨

春雨や土の笑ひも野に餘り
はる雨やうつくしうなる物はかり
春雨にぬれてや水も青みゆく
もえしさる艸何〳〵そ春の雨

猫の戀

ふみ分て雲にまよふや猫の戀
聲たてぬ時がわかれそ猫の戀

花

とち見んと花に狂ふやよしの山
けふ來すは人のあとにか初さくら

奉納

うち外を鳥の仕事や神の花
女子とし押てのぼるや山さくら

畫賛

道くさに蝶も寐させぬ花見かな
初花やまた松竹は冬の聲
見て戻る人には逢はす初櫻
何にすれて端〳〵青し山さくら
花は櫻まことの雲は消にけり

月の夜の櫻に蝶の朝寐かな
明ぬれといよ〳〵白し初櫻
明ほのゝさくらに成て朝日かな

朧

穴の明松風もなしおぼろ月
世の花を丸うつゝむや朧月
おぼろ夜やそれてはなうて人は人

桃

桃さくや幾度馬に行あたり

富士見にまかる人に

桃の色目におさまりて富士見かな
里の子の肌また白しもゝの花

雲雀

蝶々は寐てもすまずに雲雀かな

畫賛に

身あかりや雲雀の籠も地に置す

ふたつみつ夜に入さうな雲雀哉

雉子

若くさや尾のあらはるゝ雉子の聲

隱すへき事もあれなり雉子の聲

燕

乙鳥來てあゆみそめるや舟の脚

畫賛

舍りして笘とはならぬ燕かな

蛙

裾はふて雲を伺ふかはつかな

蓑生濱といふに

蛙鳴てその蓑ゆかし濱つたひ

すみれ

駈出る駒も足嗅くすみれかな

祖洲五百年御忌法會

地も雲に染らぬはなきすみれ哉

囀

隱居をことふきて

囀りを世にや讓りて松の琴

藤

地にとゝく願ひはやすし藤の花
おそろしのよりやもとりて藤の花
鶯の聲もさかるや ふしの花

《夏之部》

卯の花

卯の花や垣の結目も降かくし

餞別

日はなかし卯月の空もきのふけふ

更衣

綿ぬきや蝶はもとより輕〳〵し
おもたさの日にあつまるや更衣
二日三日身の添かぬる袷かな

冬からの皺をぬかはや更衣

牡丹

蝶〳〵の夫婦寢あまるほたんかな

衣通姫の贊に

ゆふかせに蜘も影かる牡丹かな
指折は翌へもかゝる牡丹かな

杜若

行春の水そのまゝやかきつはた
をうなの身まかりけるに
雲のゆかりそれかとはかり杜若

花御堂

蚊屋つりの艸もさけてや花御堂

若竹

風毎に葉を吹出すやことし竹

餞別

若竹となりて千里も遠からす

わか竹や雀の耳に這入る時

時鳥

ものゝ音水に入夜やほとゝきす

畫賛

音をいかに雲井にすまふ郭公

あいさつ

道〳〵に殘した聲やほとゝきす

鷄の聲つもりし耳やほとゝきす

風人にたつねられて

木〳〵の闇植ても置す杜宇

子規聞人の口もとちて置

おもひ切てこちら向時ほとゝきす

唯もとる道なか〳〵し時鳥

田植

けふはかり男をつかふ田植かな

また神のむすはぬも出て田植かな

早乙女やわかな摘たる連も有

あやめ

音はかり筧失なふあやめかな

螢

下闇に居りわすれてや飛螢
川はかり闇はなかれて螢かな

暑

晩鐘に散殘りたるあつさかな
あさの間は空にしられぬ暑かな
鹽竈のほそう立日はあつさかな
來て見れは森にはあつさ哉

涼

涼しさや氷室の雫〳〵より
涼しさや梢〳〵の吹あまり
涼しさや手は屆かねと松の聲

涼風や押れ合たる艸とくさ
涼しさやあるほと出して鷺の首

送別

道もその道に叶うてもの涼し

八十の賀

涼しさやことに八十年の松の聲

あいさつ

涼風の植所なき住居かな

ひよ子の賛

子の闇に鷄も迷ふやゆふ涼み
影坊の森てはくるゝ涼みかな

蟬

松風もをのかのにして蟬の聲
蟬の音やからはその根に有なから

清水

手あくれは結ひめのなき清水かな
都のかたへ旅たつ人に
おくらはや清水に影の見ゆるまて
目にむすふ谷間〳〵の清水かな
行さきて又我に逢清水哉

眞如平等

清水には裏も表もなかりけり
紅さいた口もわするゝ清水哉
暫の旅に赴きし人

道くさも手のうつくしき清水かな
山のすそ野の裾むすふ清水かな

雲の峯

眼にさはる鳥は消たり雲の峯
あいさつ
仰むけはきれいにあつし雲の峯

夕立

夕立や卒爾な雲の一とほり
越の日和山にて
ゆふたちの道よりもなし日和山

《秋之部》

文月

文月の返しに落る一葉かな

はしめてのあいさつに

文月や空にまたるゝひかりあり

秋

これこそと何も見初すけさの秋

秋たつやきのふのむかし有のまゝ

初秋やまた顯はれぬ庭の色

初秋やまたうつくしい水の音

蚊屋の浪かほにふるゝや今朝の秋

琴の音の家にかよふや今朝の秋

朝顔

朝かほや星のわかれをあちら向

朝顔やまた灯火の影もあり

あさかほや鳴所替るきり〳〵す

朝顔や艸臥直る夜は持す

あさかほや誠は花の人きらひ

朝貌はその日に逢うて仕舞けり

朝かほや夏の夜ならば夢の内

朝かほやをのか蔓かと蔦に咲く

殘暑

秋の部へこぼれてはへる殘暑かな

朝の間はかたついて居る殘暑かな

稲妻

稲妻や何にしるしをつけて行

いなつまの裾をぬらすや水の上

蘆

書賛二章

蘆の葉にすはらぬ尻となりにけり

蘆間から風の拾ふや捨小舟

文臺うら書

よしあしの穂に顯はれて二見かな

花野

見送るに目のはなされぬ花野哉

尾花

晩鐘に幾つか沈む尾花かな

秋風のいふまゝになる尾花かな

萩

刺髪の人

塵と見て露にもぬれそ萩の花

薄

書賛

雉子のつま隠し置たる薄かな

名

名月や手屆きならは何とせむ

書賛

きぬ〳〵は月にもありて明をしみ

名月や行ても〳〵よその空

名月や人に押合ふ鳥の影

明月やはつかしの森いかはかり

硯の題

明月やそのうらも見る丸硯

名月や唐崎の雨明てから

人中を潜る欲なき月見かな

名月や闇を尋ぬる烏もあり

石山壽賛

名月や雪踏分て石の音

十六夜や呼く人のうしろより

いさよひの闇や恥かく人もあり

十六夜や今あそこにて見ゆる雁

菊

白菊や紅さいた手のおそろしき

菊畑やけふ目に見ゆる足の跡

蘭の香に遊ふ日はなし菊の花

朝〳〵の露にもはけす菊の花

けふはかり見てすむものを菊の花

子とも手にかなふ盛りやきくの花

菊の香や茶に押合ふも此日より

菊咲て餘の香は艸に戻りけり

初雁

はつ雁やなら〳〵て聞はをしい事

初雁や聲あるものを見失ひ

はつかりや通り過して聲はかり

後の月

とり殘す梨のやもめやのちの月

山彦は宵に戻るやのちの月

後の月はしめてせはきいろりかな

紅葉

色に出て竹も狂ふや蔦紅葉

折〳〵は霧にもあまるもみぢかな

餞別

闇からぬ空はともあれはつ紅葉

ゆふくれを餘所に預けて紅葉哉

鹿

獨きく我にはほしき鹿の聲

夕くれを引あつめてそ鹿の聲

鳴

遠忌

百とせのその日も鳴のゆふへあり

追善

鳴たつやよそのわかれに暮まさり

行秋

山代の溫泉にて

溫泉の山や秋の夕へはよその事

ゆく秋や持て來た風は置なから

《冬之部》

歸花

春の夜の夢見て咲や歸花

咲〳〵も果はうそなりかへり花

みよし野はよその春ほと歸り花

時雨

京へ出て目にたつ雲や初時雨

書贊

仰向て見る人もなきしくれ哉

九重の人も見え透くしくれ哉

初時雨風もぬれすに通りけり

松風のぬけて行たるしくれ哉

降さしてまた幾所か初しくれ

日の脚に追はるゝ雲やはつ時雨

大根引

道くさの艸にはおもし大根引

蕪引

手のちからそゆる根はなしかふら引

降ものに根をそゝきたる蕪かな

尾花

安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花

決定心

根は切て極樂にあり枯尾花

千鳥

三つ五つまてはよみたる千鳥かな

こぼれては風拾ひ行千鳥哉

巨燵

尼になりし時

髪を結ふ手の隙明て巨燵かな

小六月

似た事の三つ四つはなし小六月

水仙

水仙の香やこぼれても雪の上

水仙は名さへつめたう覺えけり

雪

聲なくは驚うしなはむ今朝の雪

初雪やほむる詞もきのふけふ

あいさつ

取あへす塵に敷けりけさの雪

青き葉の目にたつ頃や竹のゆき

そつと來る物に氣つくや竹の雪

初雪や根の付さうな竹の雪

はつ雪や降おそろしう水の上

五百回御忌東御門跡へ上る

葉も塵もひとつ臺や雪の花

雪の有ものにきかすな松の聲

しなわねはならぬ浮世や竹の雪

歳暮

としの尾や柳に青う結ひゆく

行としや連たつものは何と何
閏月のそのめも見えず年のくれ
おもひ出したやうな春なり年の内
十のもの幾つの春そ年の内
春めかぬ詞つかひやとしのうち
着よこしたなりに春とやとしの内

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

多代女

多代女は安永五丙申年、奥州岩瀬郡須賀川に生れ、俳諧の名手にして殊に才女の噂高く、身風流を好み、舎兄峯巒亭主人なるもの、此の女に俳諧をすゝめたるを始めとし、雨考といふものを介して、金令舎道彦に就いて學び、其後ち松窓乙二の門に入つた。晴霞庵は別號である。文化三年彼れ三十一歳の時夫を喪ひたるも既に三人の子があつた、長女は他に嫁したるも後ちには家に戻り、長男は家を續ぎて阿部侯に仕へ、用人の役を勤め、次男は邑長檢斷であつた、ある時俳家太郎彦といふ者、公務を帶びて道を行き、晴霞庵の閑居を訪ふた、自身駕輿に乗つて從者に鎗を荷はせ、挾箱を擔ぐさま恰も諸侯の如くであつた、やがて多代女は是れを見て笑をふくみ、短冊を取上げて其れに一首を

認めて太郎彦に示した

須賀川や水鶏のみちもあるものを

と、太郎彦頗る羞色ありしといふ

吁、芭蕉はくたぶれて宿を藤の花にかり、西行は花を慕ふて限ある身の衣を代へて行く、是れ詩人の本色であらう、然るに太郎彦は從者を從がへ駕輿に乘つて他の閑居を訪ふ、勢ひ威を極めて堂々たるが如しといふも、反つて俗氣紛々たるを、多代女の諷刺、まことに太郎彦項門の一針ともいふべきである。

文政六年、多代女四十八才にして江戸に出で益々俳諧を專らにした、彼れ一代の咏句を集めて晴霞句集と名づけ、此れは嘉永六年の梓行である、慶應元年八月廿日、行年九十にして沒す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

多代女の俳句

《春之部》

初日出

むきあうて時うつしけり初日かけ

向ひなは藥にならむ初日の出

初空

初空やほのかなからも柱かけ

春立

春たつやわらひ催すひかし山

花の春

家内打つとひて

譯もないものゝこゝろははなの

渦峰の古城蹟を東にかまへたれは

朝日よき峰にむかひぬ宿の春

門松

門松や潜る出入も幾むかし

懸想文

買なからしのふこゝろは懸想文

福壽艸

色に香に名も似合しや福壽艸

芹

小松よりまた引にくし畑せり

色見えて氷のしたの田芹かな

餘寒

日光山

合す手にしはし忘るゝ餘寒かな

雪解

雪解や蝶も來さうな障子かけ

是からは田に月のすむゆきけ哉

塀こしに枯つる傳ふ雪解かな

梅

雪も降日も照りうめを匂はせる

匂ひのみした梅やかて月さしぬ

さし向る灯先くるふや風の梅

有明のはこひも遅し梅の花

坂東太郎

川幅や目はとゝかねとうめの花
我かけにものも言たし月の梅
是非庵かひとり子の賀に鉢植を送る
梅の花添てゆつらむわか齢
家督四十二の賀
初老は人の壯なるものなり萬の事務めてゆるかせ
におもふ事なかれ謹でゆるかせにする事なかれ
ぬきん出てきけよ椹のうめの花
柳
柳あれは皆にたやうな小店哉
うつかりと人ゆゝき過る柳かな
月かけの門にあまりし柳かな

鶯
うくひすや莖たち摘を見おろして
黄鸝や風の寒さも飽ぬ聲
黄鳥の氣にも入たか束ね柴
鶯や宿はともしを配るまで
御忌の鐘
空にみち空にきゆるや御忌の鐘
雜
古河暾を出てはしめて士峰を望む
父母にあふたこゝちや不二の山
藪入
高ふらぬ氣をやふ入のみやけかな

猫の戀

打とけた聲終きかすねこの戀
にくらしうなりけり猫の戀しりて

霞

御齊所の溪邊

木なかしの岩根つたひや朝かすみ
かつを木に日あしのゝこる霞かな

春

はる風や浪につまつく鶴の脛
春かせや野はおしなへて去年の艸
行くも來るも皆はる風の堤かな
はるの月あと戸も引ずゝ小唄かな

家の巽の岡に艸の戸をしつらひたるに松窓老人より晴霞の號を贈られけるとし

戸口たけ土間にさしけり春の月

行德船中

雨の干ぬ蘿のすき間やはるの月
門たてる尼もなかめつ春の月

歸雁

聲こほし〳〵雁ゆく雲間かな
ゆくかりや聲をのこして雲かくれ
日の落る山すれ〳〵や歸るかり

燕

あやしの茶店に休らへは

つはくらの下に山うるはなし哉

雲雀

美しい空にはらりと雲雀かな

蝶

日のはれやいくたひ來るも同し蝶

蛙

安積山に遊ひくらして

なけ蛙芽はるかつみに取付て

畑打

遊行柳にて

畑うちのけなけにしるや古歌一首

根分

金英の芳しきも忘かたくて

悟らねはことしも菊の根わけ哉

雛

家ふたつ孫ひとりつゝ持て蝶鳥には疎まれかちな

り

桃さくら雛見るこゝろ年よらす

春雨

はる雨や先へはぬれぬ鴛の妻

花

老の身に覺束なかりしか

初花やおもひ遂たる一安堵

むかしはものを思はさりけり

なまなかに花の見やうを覺えけり

晴霞庵に人々を招きたるをり

風盡て皆花に醉眞晝かな

諏訪の社ちかく隱居したる老人雨考を訪ふに清氏素幽なとも尋ね合されければ

我のみとおもふに雨の花見かな

御殿山にのぼる

花の中早世わたりの烟かな

菊畦老人神路山をはしめとしてよし野をかけたる旅立の餞別

指折てまたんかならす花のつと

《夏之部》

更衣

彌生に閏ありけるとし

ひとつ最ぬきしかけふは更衣

老情

淺ましや十日後れてころもかへ

青簾

東都僑居

男手をまつて懸るや青すたれ

新茶

來合て膝を交へし新茶かな

牡丹

洲先にて

醉さめを花に吹るゝほたんかな

芥子　腰越

みしか夜をあらそふ芥子の一重哉

桐の花

門掃てさしてある戸や桐の花

茂り

小莚に俎板なほす茂りかな

子規

小みしかく待夜も明てほとゝきす

摺上川にて

早き瀬や影もうつさす蜀魂

東都槇町僑居に雨塘一蕙護物の人々打よりて戀と
いふ題を探りて

又こよひ嘘にせまいとほとゝきす

幗

福島客舍

膳引たあと掃出して幗さはき

競馬

書贄

あふき立てなりの止ぬや競馬

青嵐

朝比奈切通し

ちからたけ吹れてゆきぬ青あらし

五月雨

有かひもなき柵はしや五月雨

那須の溫泉に雨籠して

見わすれし獨活の葉伸や五月雨

蟬

掃除すむ朔日はれや蟬のこゑ

向島鯉屋に遊ふ

せみの聲朝から簾ひと重かな

明易

繪島夜泊

休みなく浪の音して明やすき

旅にありて

明易き夜やこゝろ得て川手水

雲の峯

白華山

鐘の聲その中にあり雲の峯

涼

涼風やぬけてひろかるひとつ窓

我三府にといへるにはたかへて

眞中へねたれはすゝし菅莚

蓮

今すこし朝て置たし蓮の花

觀魚亭このかみの許にて

膝に手をおくとき蓮の匂ひかな

清水

目しるしの櫻わすれぬ清水哉

蓮をいたはりて

立かゝり丸藥こほす清水哉

芽の輪

日の落る方をうしろに芽のは哉

遊女の書に

髪かさりして窮窟な芽の輪かな

土用干

小さかしき女房や檣に土用干

表具屋にひと日まかすや土用干

《秋之部》

今朝の秋

椽先や相手なけれと今朝の秋

七夕

七夕や寐ころも過て笙の音

七夕やかさりある夜の晴くもり

艸市

艸市や露をあたひの持重り

魂祭

魂柵や手のとゝく子のうれしかり

よく風の這入る坐敷や玉まつり

踊

袖におく露ふりこほす踊かな

盆の月

取はやす事にはせねと盆の月

一葉

くさ〳〵

おとろへやひと葉の桐にあとしさり

朝顔

朝かほや海の淺黄を垣ひとへ

女郎花

つれ〳〵とたつや夕日の女郎花

手こゝろに折そろへけり女郎花

萩

横に寐てうけるや萩の運ひ風

月寒かりしあした

夜のうちの手際や萩のみたれ咲

藤袴

名にめてゝ植ても見しか藤はかま

芭蕉

書讃

古人この枯木に雨の夜もすから

蕃椒

慾のないもらひものなり唐からし

虫

肘杖やひとりにをしき虫の聲

老にけり虫に寐ぬ夜の常になる

日のあるをわひる細首や艸のむし

竹の春

竹書讃

雨露の深きめくみや竹の春

蜩

神別

ひくらしの猶涼しめる御庭かな

きり〳〵す

消のこる行燈にしはしいと〻かな

飯坂溫泉

一坐敷とまりは起てきり〳〵す

秋

何となや日は暑けれと秋けし、

筋かひに雁とからすや秋の暮

いそかしい中に我のみ秋の暮

網ほさぬ門とてはなし秋まつり

露

あるを見て立とまりけり畑の露

沖の石にて

置露も苦のたすけや石の肌

霧

霧ふかし今出る船の聲はかり

稻

懸稻に袖のほめきや通り雨

田家

戸明れはことに月夜や稲の波

初月

初月や拂うて見たき根なし雲

はつ月や翌をちきりて門別れ

月

名月や取つきかねて消る雲

大梅東海二人に弊庵を敲かれて

まつ宵や翌をはらみし庵の客

入かしとおもふ日脚やけふの月

こゝろおく雲はさはけてけふの月

十六夜や昇れはおなし峯の月

晴霞庵をはしめてかまへたる時は花のあした月の夕へに招きし人々席にみちけるに皆なき人となりて今は舊友清民に對するのみなりけり

膝抱て二人無言や月の友

今宵の空満かりければ人々をうなかす文めくらしてまつ晴霞の扉をひらきける

ひとり手に火もこしらへて庵の月

良夜無月

とても降雨とおもへと月戀し

夜長

誰そきゝはせぬか夜長のひとり言

齊川村にとまりて

炊するおとも夜なかし壁ひとへ

菊

きく咲や待はひさしき物なから
豆はねる門の日よりやきくの花
足らぬは過たるにまされりとかや

けふの日やひとつふたつの菊の花

九日迎山亭にて

限りある月をかきりにきくの花

木の葉

鹽竈

神さひて秋もちり敷木の葉かな

行秋

行秋や暮てもしはし高根晴
翌からは名のつく雨や暮の秋
行あきや隙の明たるさゝけ垣

《冬之部》

小春

辻街のゆきゝ夜まて小春哉
江のうへの朧にくるゝ小春かな

神無月

此ころは月も夜ことや神無月

枯野

時雨塚可親亭翁忌

おもひ入かれ野をけふの障子こし

時雨

泌る湯に取あふ竹の時雨かな

新たになりたる別室に靈像をうつし奉りて

折からのしくれも聞や板ひさし

けふはかりと翁の宣ひしか

此うへにまた年よらん初しくれ

あら川の音に添ゆくしくれ哉

落葉

餘所の犬までか寐にくる落葉かな

吹上て風のはなるゝ落葉哉

木枯

木からしの撫ちからなし裸山

冬枯

冬枯や稀に戸のあく別座敷

冬木立

能き衆の泊る坐敷や冬木立

冬牡丹

ふうはりと綿もきせたし冬牡丹

千鳥

ひとつふたつ別に聲すむ千鳥哉

浦千鳥屋根は雀の夜明かな

鴨

戸にさはる根山おろしや鴨の聲

浮寐鳥

松の葉のこぼるゝ中や浮寐鳥

鴛

起臥の別にあつかや鴛の妻

憚らぬ世の起ふしや番ひ鴛

笹啼

笹鳴やもの數いはぬ坐のあまり

冬至

朝の間に花屋の見舞冬至かな

雪

初雪やむかしのこゝろ今寒し

書讃

少將のすかたは雪に立かゝし

黄昏や馬屋出てゆく雪の鹿

こけさうて手のつゝけたし松の雪

我あとを降消せ雪の片折戸

隱れ家の猶かくるゝや竹の雪

冬の月

門川やよく澄底に冬の月

冬籠

雨聞てのはす手あしや冬籠

年忘

三絃もうたも下手なり年忘

清民亭

延た日とけふこそおもへ年忘れ

行歳

ゆくとしや只居るこゝろいそかはし

如雲子かものせし松島の碑は翁の名文なりそれ摺たるを屏風に仕立て

物いはぬ人に親しく年くれぬ

行年や障子を徹す日のぬくみ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

古川花讃女

花讃女、姓は古川氏、名は松、文化五戊辰年江戸に生れ、先天的の風流である、横山萬旧といふものゝ妻となり家事の暇を得て、採茶庵萬里に隨て俳諧を學んだ。

ある桃の節句に自己の古さ雛を並べての句に

叱られた昔なつかし雛の鼻

ある時夫と共に隅田川に遊び、折から墨堤の櫻樹の下に樽を枕として眠り居る人を見て

梅てさへ女に化けぬ夕さくら

深川に遊びたる時の句に

水舟は誰に賣とて月もくむ

小町の書に題して

ちりきはゝ芥子に似すとも鶏頭花

夫の歸りを燈火のもとにて待ちつゝ道々の寒さを思ふ、と前文して

冬の月心てあるくあすこゝ

文政十三年七月廿四日、年齢僅かに二十三にて歿す、同年の冬、夫萬舊は此の女一代の咏句を編し、卷尾に追悼の俳句連句等を載せて刊行した、乃ち萩陀羅尼と名けたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

花讃女の俳句

《春之部》

歳旦

聞ものはみな産聲そ明の暮

萬歳の齒固に夜の明にけり

父君にかはりて家々にことほき申させんとうなゐ

子に上下うち着せ出させ侍るとて

元日や讓らぬものは年はかり

我も春にあはゞやと鏡に向ひし嫗にたはむれて

若やくや老か白髪も花の春

梅

扇をる家は靜かようめの花

簑虫も春にはなりぬ梅のはな

來る度にさかぬそ梅の花なれや

鶯

此ころの鶯ちかし藪屋敷

霞

不破の關倒れかゝりし霞かな

白魚

佛にも備へさうなる白魚かな

春

長かけの先から見ゆれ春の風

摺箔の小袖にふけや春の風

春の日や眠い顔なる賣ト者

春の日を彫かけてあり小紋形

朧

朧〳〵其夜をのりのつくならん

埋み火にとめ木薫るや朧月

猫の戀

木天蓼は何のくすりそ猫の戀

雀子

雀子の笹うつりすや晝時分

蝶

蝶々の霞ませに來る廣野かな

道連にならんと蝶も羽袖かな

手折たる草にも蝶のたはれけり

椿

大津繪に出てもたせん赤椿

綿うちか日向にちるや白つはき

麥搗の日に〳〵落す椿かな

乙鳥

せはしくも家は忘れぬ乙鳥哉

蛙

芹の根に顔出して行かはつ哉

長閑

のとかさや橋からみゆる不二の山

雛

椿ちつてこけかゝりけり紙ひいな

是ほどの月夜もほしや雛の柵

桃

機たてぬ家とてはなし桃の花

めき〳〵と馬のそたつや桃の花

花

夜の花戀も思はぬこゝろから

花盛り己かちらしてひと景色

借着せぬ果報はこよひ櫻かな

椎の實も五升うれしや花盛り

つい戻るこゝろで出たを夕櫻

管弦の灯のはしりこむ櫻哉

有明の月にならんてさくら哉

降につけ吹につけ動く花こゝろ

山吹

やま吹に流を付る日頃かな

山吹や垣をくゝれはつねの水

藤

朝〳〵のあかね移して藤の花

菫

飛〳〵にすみれ咲けり筒井つゝ

行春

世の中にたつさはる身のいたつらに過る月日のみ

多くて

存分にいつ花はみん暮の春

行や春其角か奴寐てるても

《夏之部》

牡丹

牡丹咲てあたりに草はなかりけり

さくや牡丹ちるへきさまはなかり鳬

卯の花

うの花やまたうら若き尼か庵

月の夜をこつそり散や花卯木

更衣

卯の花の白うさくとて袷着る

花の時の帶のひろさや衣かへ

子規

しは〳〵とこたまもそうや子規

さん橋はぬれてすへるそ時鳥

老のいさめの身にしみ侍りて

朝起は耳にもくすり　郭公

待人のみゝへ入らぬかほとゝきす

初そらのうらの夜明か時鳥

月のうへにまた都あり子規

山寺の僧耳うとし郭公

ほとゝきす啼や葉蘭に打ひゝけ

空は日にあはぬ眼鏡や蜀魂

盗ひとの出て行跡やほとゝきす

冬のたかんな春の茄子あな慢勝な人の心や

曉や夢に啼てもほとゝきす

けふは老人にみかたして

明はやし耳は老ても郭公

新茶

念佛のうしろにわかす新茶哉

閑古鳥

市中の住居のいとかしましくて

鳥にも鳴てきかせよかんことり

蚊屋

家うれし月か動かす蚊屋の裾

稚遊ふほとにちりけり宵のかや

菖蒲

繼〳〵も袖の香清し菖蒲賣

蓑笠の姿もうれや菖蒲の日

麥の秋

飼猫もうゑた聲なり麥の秋
麥秋や櫛さへもたぬ一在所

田植

三味線はしらぬ里にも田うた哉
早乙女の憎けは見えぬ蔦田かな

短夜

みしか夜の顔か見ゆるそふつか醉

五月雨

蜘の圍にひまこそ見ゆれ五月雨

五月晴

かねてねかひしことのむなしからてやんことなき
君の御前に出づべきのみゆるしをうけて

五月晴世は廣くこそ思ひけり

百合

白百合やひろい御寺のうしろ畑
餘の花はみな日の中そゆりの花

螢

閨のやみに包む螢をはつと放す
きさいの宮にてむたり賢女たちを垣間見しつる男
の心いかゞありけん
むれよ螢物云ふ顔の見ゆるほと

蝸牛

肖柏かうしは伊達あり蝸牛
念佛の鉦に角かくすかたつふり

蟬

茂り枝のいよ〳〵重し蟬の聲

せみ啼や脂の流るゝ呪詛釘

鵜

鵜遣が妻もつまなりちらし髪

暑

かんさしよ櫛よさて世は暑いこと

なま道心のおほつかなさを

髪剃てみても浮世はあつさ哉

暑日やしふいかほなる辻羅漢

女のもの書ふりいとにくしましてや我うしさかい

ふへきこともなく蚯蚓かきせん罪ふかしといなむ

を筆もちそへてゆるさゞれば

墨つけてあたら扇を暑うせし

わいへんは戸張帳はあらすもよき風は合壁にたて

こまれたり

催馬樂の柏子に暑きあふき哉

涼

すゝしさや兎の消し竹生島

さゝ波や志賀の暑をすゝき捨

子を寢せた間をぬけて出て涼み哉

うをを守れと殘されてしのひかねつゝわつかに水

うたせて

草に露こしらへ物もすゝしいそ

團扇

色〳〵の風を擔けぬうちは賣

子は寢ても手の休らぬ團扇哉

夏の月

棟の著莪もぬれた包なり夏の月

蠅

伽羅たけは又物好の蠅か來る

《秋之部》

相樸

いつも春のこゝろなるへし關相樸

秋

そほ降てたしかに秋の來りけり

秋の闇なとり過行町はつれ

魂祭

玉柵やみな露くさき物はかり

世わたる業のさま〳〵なる中に年頃よりか枴かけたる男の精靈の迎とか聲おかしく呼ありくそを招て玉祭せしあやしの具ともひとつになしてかれにあたふる亡たま送るとゝなへつゝ捨るかことさいつれをとわさかねたるしはゞの今さらにあさましくこそ

露の世は包てしらし眞菰苞

稲妻

父は汝をにくむにあらず母は汝を疎に非らずと祖

翁の曰し實に親心のいかゞ有けん
稲つまに又見歸るや子の寢顔
いなつまに打かふせたる投網かな

朝顔

朝顔のめてたき霧の笆かな
蕣もちるといふ名はもたさりし

萩

闇ならよかろとは伊丹の翁か花の丶深せつ我もた
しなき露を大事に
萩茂る庭に勝手のちかひけり

薄

刈萱はあまり艶なし花すゝき

月の入るべき山もなし
武藏野は空につかゆるすゝき哉

秋

露の間の朝顔も朝な〳〵に咲かへては盛久しと詠
もすべし
摺子木も五寸へりけり秋のかせ
西行も思たらすとこそ悔み侍らめ
鳥よけの繩はきれたりあきの風

鷄頭花

小町のゑに
ちりきはは芥子に似すとも鷄頭花

案山子

あなむさんや弓箭取身は何やらんと熊谷も心弱く
そ思ける

笠取れは坊主あたまのかゝし哉

菊

菊は花の隱逸なる物とや
つくり菊世はむつかしと菊もみん
彭祖ものちはいかゝ有けん
生延て蝶何になるきくの花

《冬之部》

時雨

家根葺か宿も時雨の軒端哉
松の木にひつゝいてゐるしぐれ哉

芭蕉忌

芭蕉忌や筒にさしたるあすならふ

歸花

自剃する尼か小庭やかへりはな

冬牡丹

顔みせやこゝにもひらく冬ほたん

雪

捨られたかゝもや友や雪の道
松風おとつるゝゆふへ砧聞ゆる夜更とにかく例の
宵まとひをわらはれなからもまた
納豆賣の聲も寢耳や雪の朝
むつましき友を得て

あちらては、また我を見ん雪の人

北國のさまを聞侍りて

大雪や死なするるそと思ふのみ

紙衾

ふとん着てねたる姿やといふ句にすがりて

北嵯峨の山も加ふか紙衾

春待

春を待身は立よらし鏡山

大晦日

紙子着た人もうき世の大晦日

除夜

もう春か除夜も芽獨活の匂ふ家

＊　＊　＊　＊　＊　＊

小河梢風尼

梢風尼は伊賀上野の人、小河風麥が女にして、後年友田氏に嫁し、夫死したる後は薙髪して俳諧を學び蕉門に名聲高く、其秀句と聞えたるは

名月やもたれてまはる椽はしら

生涯の句を撫て『木葉集』と名く、世に行はれず惜むべし、翁（芭蕉）の未だ故郷に在つて忠左衞門と稱したりし時衣服の世話など受けられたといふ、後年深川の庵へ便して俳諧袖といふ物を贈つた、是れは文臺さばき宜き樣にと利せし物數寄にて、右の行一寸ばかり短かき服であつたとは、『俳家奇人談』の傳へる處である。

梅さくや扨も若菜の汁かげん　千萬夢堂
春の日や渡舟にも思ふ人　同
戀中や思切戸に花のちる　同
老ぬとて秋風たてそ竹婦人　千萬夢堂
烏扇の月には疎き戰かな　同
鳴の巣や吹れ〳〵て芦のやみ　同
初月や蔵にせんとて植ぬ竹　千萬夢堂
稲の花居ながら富士を詠めけり　同
只一葉まことに秋の思ひかな　同
川音や夜寒の月の晴かゝる　千萬夢堂
殘り菊されども並ぶ花はなし　同
乳呑子やふところ山の暖鳥　同

西島某の妻

西島某の妻は、才女にして且つ俳句に妙を得たとのことである、雪のしきりに降りたる夜、その夫は我が家に召使ふ小者をつれて外出せんとしたが、妻はさま〳〵に之れを止むれども、聞かぬ、さらばよと『雪降りて寒さも強し、御身のさはりのみならず、小者もいとあはれにとて』と

我子ならともにはやらじ夜の雪

と無限の情を一句に云ひあらはしたので、夫は大いに感じ、遂に其の外出を止めたり、世人これを聞いて、古へは一首の歌よく天地鬼神を感泣せしめ、今は一吟の俳句、よく夫の外出を止めたと語りあへりといふ。

野山にもうす衣着せて鳥交る　鶯里
日のあたる蝶は二度目の朝寢哉　同
鶯や住たく思ふ此あたり　同
紫陽花の露もこぼさず水鏡　鶯里
時鳥二の聲すこし遠かりし　同
殘惜し只卯の花のちりところ　同
眠る夜の外に起たし今日の月　鶯里
さそはれて小鳥も飛し木の葉哉　同
芭蕉葉の風こぼれけり夕念佛　同
其末の墨田に清し落水　鶯里
夜半の雪月皓々と晴にけり　同
松竹に風もさはらず大卅日　同

某の妻

これは豐後國の事とばかりで、何時の頃、何といふ名かは詳かならねど、ある片山里に貧しくくらして、子ひとり持てる夫婦があつた、何やらん心に違ふことのあつて夫は妻に離緣をとらせんとしたが、妻は悲しさ限りなく、さま〳〵に詫ぶるも、夫は之を聞いれぬので、妻は止むなく涙と共に家を立出づるとて

すれ〳〵の中に花さくとくさかな

と口吟したので夫も大いに感じて、再び呼び戻し、其後は睦まじく暮したといふことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

紅梅や流れへ落す琴の爪　黄鸝子
山吹の雨靜なりくれの鐘　同
遊ぶにもかせぐにもよき蜘生哉　同
芍藥に夕日を讓る垣根哉　黄鸝子
爐塞やいつ迄艸も色に出し　同
散込んで松の古葉も蚊遣哉　同
初雁や月もつい其先らしき　黄鸝子
月になり雨になり夜は更にけり　同
窓先や芭蕉一株ほしけれど　同
蓮池にきくものらしき雹かな　黄鸝子
寒菊に都合のありや垣もせす　同
初冬や蔦に殘りし昔みち　同

遊君の俳諧

俳諧は高貴社會よりも、其頃は寧ろ卑賤社會に行はれたのであるから、俳諧の盛であつたと同時に、下賤のものにても之れをよくするものがあつた、特に遊君の中には巧者多く、通常俳人をして驚膽せしむる程の名句も少なくない、尤も古への遊君は、なべて文藝茶道を修め、其志想も一躰に高尚のもの多かつたので、今の娼妓などゝ同一に語るべきではない、既に遊君にて有名なる歌人もあり、其歌の敕撰集に入つたのもあつた、俳諧にて有名の遊君は、江戸北里の奥州、瀬川、高尾、越前三國の里の歌川、其他たま、薄雲、薫、など、茲に其の吟句を示さうなれば

▲客の來らざりける夜

男なき寐覺はこはい蚊帳かな　花咲

▲睦しかりし男と故有て絶々になれる時に詠る

戀死なば我塚でなけ子規　奥州

▲卑下の心を

其數に入もはづかし夏の菊　染之助

▲花筏の紋をつけしを人の笑ひしかば

流れなる身に似合はしき花いかだ　長門

▲述懷

我形を恨みつ風の糸やなぎ　松山

▲常に通ひくる男の曉ごとに歸るを恨みて

行水の一夜どまりや薄氷　はせ川

▲客に贈りて

たゝいても心のしれぬ西瓜かな　歌川

▲

目覺しに琴しらべけり春の雨　同

さそふ水あらば〳〵と螢かな　同

瓜紅のまづくに咲や秋海棠　同

おく底のまれぬ寒さや海の音　同

▲廓内の櫻をながめて

こゝにさへ無な吉野は花盛　吉野

▲

宵々のまつ身につらき水鷄かな　若紫

▲

我をのせてくるわをいだせ紙鳶　たま

▲野や山の錦にはづるこゝろかな　よそほひ

▲名月に海少し見る木の間かな　まづの尾

▲勤めの身に茶といふことのわびしければ
わが茶のゆ露次はさくらの仲の町　同

▲戀猫に見せばや紋のかげひなた　小車

▲曾我物語を思ひいで、
親の恩わすれぬためぞ二日灸　いく代

▲青柳やたが髪あらふ橋のもと　花扇

▲すれ〳〵の木賊の中やつゆの月　長尾

▲春風やはなには花のあひしらひ　わか紫

▲さる方へうけ出さるゝ時に
ゆめに夢見る心地なり花の駕　勝山

▲ゆかりとはうれしき色や燕子花
白鷺やまけずおとらぬ雪の色　小紫　同

▲なまめかす心はづかし女郎花　常夏

▲ある曉まろうどにわかるゝ時

きぬ〳〵の雨はなみだか時鳥　蔦の助

▲

燕子花みさほはかえじかくし紅　八ッ橋

▲

志のぶ身にうれしき雨ぞ郭公　ひな鶴

▲

志ら露やくさにおくのは艸の色　小いな

▲

起伏を風にまかすや萩すゝき　萬山

▲母の病の快方をよろこびて

くもの巣のちりも見すくや月今宵　若妙

▲

うれしげに虫のすがるや我たもと　小式部

▲

はなれ鵜やおなし流れに浮沈み　小さん

▲

いろ〳〵の花むつましき世なりけり　今紫

▲傾城の碁といふ題をいだして句をもとめければ

碁一目苦界の暑さわすれけり　歌之助

▲

身にばかり匂ふはいかに闇の梅　花紫

▲

くき立やたゞ春の日のめぐみより　雲井

▲

わが罪をゆるさせたまへ寒念佛　黛

▲

袂にも包みあまるやつくま鍋　もろこし

▲

初雪や誰れが誠もひとつ夜着　薄雲

▲

うけあまる雨の袂や花吹雪　橋立

春の夜や大名衆も知らぬ夢　同

▲

夏痩と人にことふる泪かな　薫

▲

思ふなと積では崩す炭火かな　宮路

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

皆優美にして至情がある、一誦覺えず三嘆の價値を有す、彼れ遊君等が卑賤の境遇にありながら、斯くの如く思想の優美なる、まことに感ずるに餘りありと言ふべきである。

春の鳥遊ぶと見するしほらしさ　鶯里
梅に目をはなせば只の月夜かな　同
鹿の寢るほとの雪間や三笠山　同
御湯立の太皷なりけり五月晴　鶯里
行燈の關の戸しめよ火取むし　同
聲の跡雲もあり〳〵　郭公　同
名月や庭の木立をいくめぐり　鶯里
朝顏の隣と合し時計かな　同
此右に出る色なき黃菊かな　同
尾根を越す鴨や一吹風の添ふ　鶯里
鮟鱇や鰹の兄か弟歟　同
只寒き夜とをもひしにみぞれ哉　同

さき女

『俳人百家撰』の傳へるところによれば、さき女は祇園町邊の藝子であつたが、半時庵淡々が根引して妾としたのである、性質發明にして俳諧を好みたるが、幾程もなく病の床に伏して枕あがらず、自から醫藥の術も盡き賴りなき身をあきらめて

　彷あられ手にとり見ればもとの水

の一句を吟じ、淡々に向つて云ふに

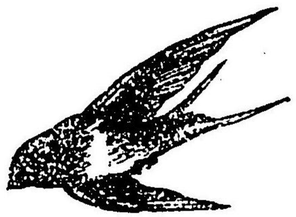
『さても是までのいつくしみ忘れがたく、御名殘もおしく、しかしわたくし死して後、一家のもの共が事おたのみ申ませぬ』

といへりと、淡々聞て、賴みますると云ふ事を舌たみたるのであらうと思ひ、再び問ふに、さき女は頭をふりて

『少しもたのみませぬ也、アノ申ふのぬてござります』
と云つて笑ひ〳〵て死したので、淡々もあはれに思ひ涕にむせび、追善供養の及ぶだけつくし、

死んであふ蓙もあるらん筒の中

の一句を手向けたといふ。



遊君高尾

『俳人百家撰』の傳へる處によれば、江戸は吉原、三浦屋の抱え遊女高尾は天性の風流、歌俳共に妙を得、或る時藤の自畫の盃へ

御情をくみかわす藤の裏葉哉

と自讃したことあり、其頃の客、此盃を見て『盃びらき』の酒盛せんと、美酒佳肴をもうけ、高尾は盃を客にさす、客おさへたりと返しけるに、高尾此盃のあひは、京の島原、吉野太夫にたのみたしと云へば、面白しと尾清といふ茶屋に、京の吉野かたへ持せ遣りしに、吉野も全盛なれば、今一度あらためてと押返す故、手元改めのあひを、大阪新町の高窓太夫に頼也、と尾清大阪へ持行き高窓呑んで、江戸へ下し、高尾呑んで、京へ遣はし、吉野呑んで又江戸へ下し、夫より高尾呑ん

で客にさす、此盃を都かへりと云ふ、或時かの伏猪の書を書さて、高尾に賛せよと有ければ、心に染まぬ客とおもひ、

猪にだかれて寐たり萩の花

云々とある、また名句としては

初雪や遊ぶ身ながら又あそび

遊君吉野

『歌俳百人選』の傳へるところを掲げて、吉野が風流にたけたるを示さうならば

さかりをぞよそにおくれて家櫻
うきに早きは落葉なりけり

此讀人吉野は其身傾城のうき勤めを述懐の歌なり、廓の内の家さぐらは吉野、初瀬とかはりて遲く咲て早く散る、人間幸不幸を論ずるにおよばす、非情の艸木の上にもありとあきらめし歌なり、此の吉野は名高き者にして、或時曲輪を見てよめる

爰にさへ嘸なよし野は花さかり

是籠中の吟にして、夫より吉野と改名したり、夫までは杜若といひし、

或時此吉野を四國の丸龜の大人内田三藏といふもの請出し、國に連れ行かんとせし時、吉野ちいさなる石臺に櫻の咲亂れしを植えて持出て、我身のかわりに此の櫻を御國元へ召連れられ私をば御免下され候へかし、すべて遊女に限らず女の身はとし若なる内色香にめてゝあてやかなるも次第に衰へて寵愛忽ちに失せん事速かなり、此櫻も同じ事にて盛りの内は詠めあかせと散れば捨らるゝ身の上なり、此石臺の吉野櫻にて御不肖下され候へといひければ、四國の客も尤と落涙して身請をとゝまりぬ、其後吉野は尼となりて覺法と名を改め、掛川の邊り逢生といふ里へ引こもりぬ。云々とある。

* * * * * * * * * * * * * * *

遊君濱荻

濱荻は京の島原、難波屋與左衞門の抱へ遊女であつたが、其頃難波屋が江戸の廓へ移轉することゝなり、遊女十余人を連れて下ることに定まつた、濱荻も其一人であつたが、近傍に住む父母を殘して江戸へ下ることの悲しく、願はくば父母をも伴ひて下らんことを抱主へ依賴したが是れは許されなかつた、何とかして此事を成就させたいと、ある夜馴染の客に談すと、客は彼れが孝心に感じ、路金を與へて抱へ主に賴み込んだ、元來抱主は冗費をいとへばこそ濱荻の云ふことは諾かなかつたものゝ、客が其の路金は調達するといふので早速に承諾し頓て父母と同行して江戸へ着したといふ、濱荻は性質風流にうとからぬ程なれば勤めの怠りもなく、故に客も絶へ間なく、此家の至然繁昌した